

今日から一泊二日で掛川市にある家康ゆかりの場所を見学して来ます。

特に、徳川家康の側室お愛の方に関係する場所です。

大学で同じ学科のである各務原市にいる一人と掛川市にいる同じゼミであった一人を尋ねて行き、案内を頼んでいます。

掛川城 室町時代中期の文明（1469年 - 1487年）年間に大名・今川義忠が、重臣の朝比奈泰熙に命じて築城したと伝えられている[1]。当初は龍頭山より北東にある子角山に築かれており、龍頭山の城は1513年に新たに築城されたものである。

そのまま朝比奈氏が城代を務め、泰熙の子孫である朝比奈泰能・朝比奈泰朝が代々城を預かった。ところが、1568年（永禄11年）、朝比奈氏の主君の今川氏真が甲斐国の武田信玄・三河国の徳川家康の両大名から挟み撃ちに遭い、本拠地たる駿府館を捨てて泰朝のいる掛川城に逃げ延びた。このため掛川城は徳川勢の包囲に遭ったが、泰朝はよく城を守ったためなかなか落城しなかった。この際、徳川勢はかつて掛川城があった子角山を拠点としたという説がある。しかし、兵数の差もあって和議で氏真の身の無事を家康に認めさせると、泰朝は開城を決断した。

氏真と泰朝は1569年2月8日（永禄12年1月23日）に掛川城を開き、相模国の小田原城へ退去し、掛川城には城代として家康の重臣・石川家成・康通親子が入った。間もなく駿河国に入った武田信玄が徳川家康と敵対し、掛川城に程近い牧之原台地に諏訪原城を築き、さらに掛川城の南方にある高天神城では武田・徳川両氏の激しい攻防戦の舞台となった。しかし掛川城は1582年（天正10年）の武田氏の滅亡まで徳川氏の領有であり続けた。

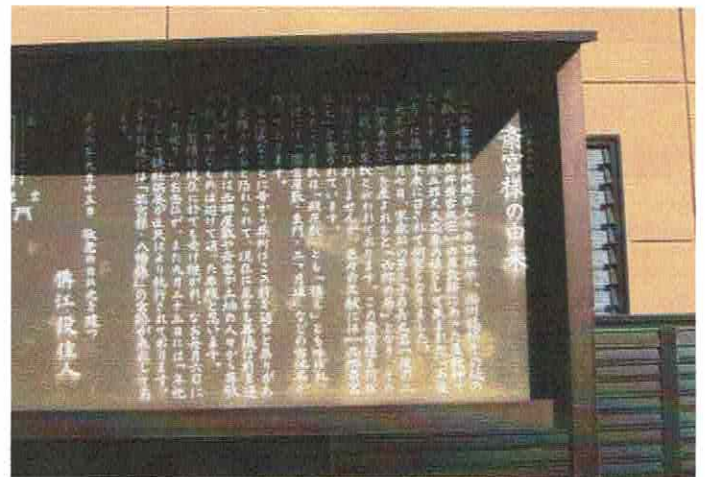


次に、「於愛の方」（おあいのかた）の通称で知られる「西郷局」（さいごうのつぼね）は、「徳川家康」の側室であった女性です。容姿が美しく、温厚誠実な人柄で、徳川家康からの信頼も厚かったとされ、江戸幕府2代将軍「徳川秀忠」と、尾張清洲藩主「松平忠吉」（まつだいらただよし）の生母となりました。

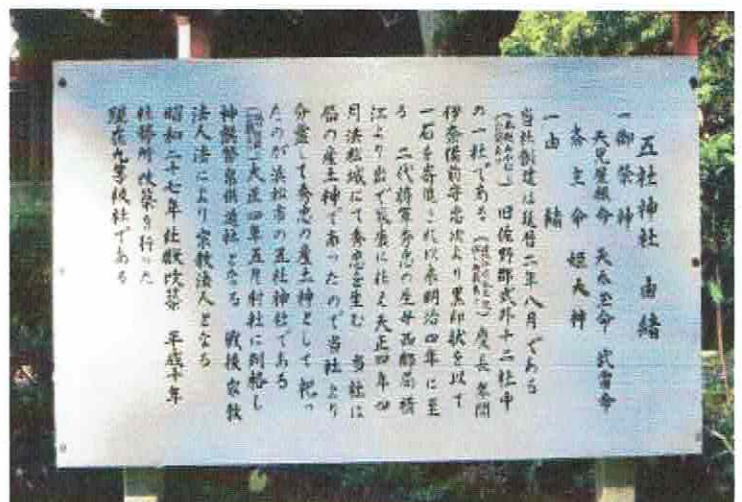
お愛様の産神様は二社あります。小さな祠ですが、一つは弓矢八幡宮です。



お愛様の産神様は二社あります。小さな祠ですが、もう一つが生家の屋敷神社です。「二代將軍徳川秀忠公生母、西郷の局生誕の地」という碑が立っていました。これが西郷斎宮（いつきみや）です



次に、お愛様の産神様です。これが五社神社です。宮司さんとお話をしてきました。



最後に、事任八幡宮（こののまま）に行って来ました。

日本で唯一、主祭神が“言の葉で事をとりもつ働きをする神様”の神社をご存知ですか？それは静岡県掛川市の旧東海道沿いに鎮座している「事任（こののまま）八幡宮」。言霊の神様の后神・己等乃麻知比売命（こののまちひめのみこと）を古来よりお祀りしています。

創建年代は不明ですが190年頃には鎮座し、平安時代初期に現在地へ遷宮したようです。「事（言）のままに願いが叶う」と言われ、平安時代に書かれた『枕草子』にも「このまま明神」として登場。『方丈記』の著者・鴨長明も和歌にその名を詠んでいます。



二日目は、高天神城と横須賀城を見学に行きます。

午前中に高天神城に搦め手門から登ってきました。戦国史に残る攻防が繰り返された高天神城ですが、天正9年（1581年）家康が奪還するとその後まもなく高天神城廃城になり、歴史上の表舞台から姿を消します。守りやすく、責めがたく、加えて迎撃性にも優れた高天神城でしたが、三河・遠近・駿河の三国を手中にした家康にとってはもはや高天神城の戦略上の意味はなくなってしまいます。その一方、横須賀城には城主を置き、城郭として存続させました。当時の横須賀城は港を用意した船による大量物資の輸送を可能とする物流拠点としての城郭でした。高天神城のように高い戦術性だけでなく、物流拠点としての経済的側面が城郭にも求められる時代に移り変わることを家康は十分理解していました。

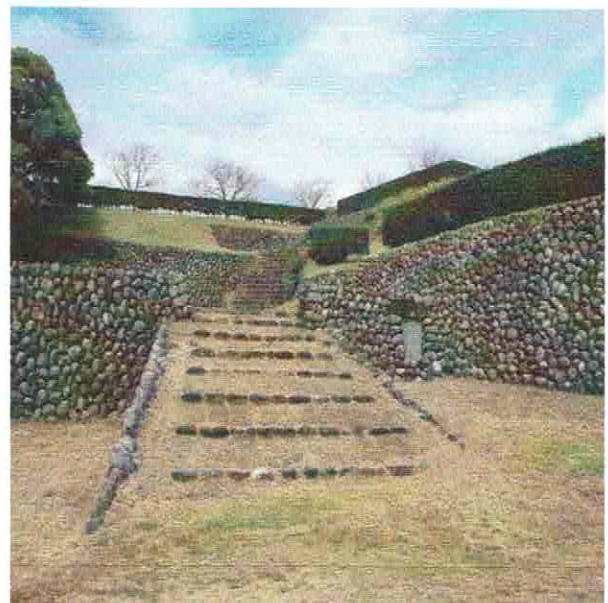


午後は横須賀城跡に行ってきました。

天正6年(1578年)、武田家の高天神城を締め付ける付城市群の中核として、徳川家康が大須賀康高に命じて築いた城郭である。大須賀家2代の後、渡瀬家1代、有馬家1代、その後、再び大須賀家2代となるが除封され、能見(松平)家2代、井上家2代、本多家1代とめまぐるしく藩主が代わり、西尾忠成が2万5千石で入封し、以後7代をもって明治維新を迎える。

西尾家歴代の藩主のなかで忠尚は名君の誉れ高く、若年寄を務め5千石加増され、都合3万5千石になり、老中も務めている。

城郭の特徴 横須賀城の特徴は他に類を見ない、天竜川より運ばれた玉石垣を用いた築城法である。天守閣は三層四階であった。宝永地震のため湊が隆起してしまい、用水路を作ったのだ。



学生時代に戻った気分でお話しながら、ゆかりの地を巡ってきました。